

NEWS LETTER

from Iwami Art Museum

March 2014 vol.19



島根県芸術文化センター
SHIMANE ARTS CENTER
島根県立石見美術館
IWAMI ART MUSEUM

島根県立石見美術館ニューズレター

企画展「絵本原画展 きかんしゃトーマスとなかまたち」

「きかんしゃトーマスとなかまたち」に描かれた英国鉄道

企画展「美しい日本のデザイン Made in Japan 50's-60's」

「東京オリンピックの時代」のデザイン

学芸員の意図をさぐる

特別展「森英恵 オートクチュールの精華」の展示作業に密着して

19

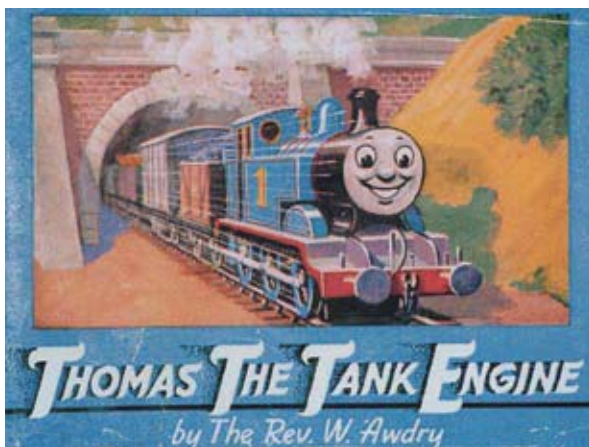


《トヨタ コローラ》 1966年 トヨタ博物館蔵

「絵本原画展 きかんしゃトーマスとなかまたち」

2014年5月24日(土)～7月21日(月・祝)

休館日:火曜日 開館時間:午前10時～午後6時30分(展示室への入場は閉館30分前まで)



A



B



C

A. 絵本「機関車トーマス」(「汽車のえほん」シリーズ第2巻)表紙

B. 原作者ウィルバート・オードリー

C. ガンバー&ピーター・エドワーズ《ブルーベル鉄道のステップニー》1963年
(4台の機関車の内一番左がステップニー。右の3台はディーゼル機関車。)

「きかんしゃトーマスとなかまたち」に描かれた英国鉄道

世界中で愛されている「きかんしゃトーマスとなかまたち」。頑張り屋、いばりんぼう、おっちょこちょい、など個性豊かなキャラクターたちの活躍する物語は、テレビシリーズで広く知られるようになり、子どものみならず大人にも人気が高い。本展では原作となった子ども向け絵本シリーズ“The Railway Series”(邦題「汽車のえほん」)(図A)の原画を中心にその世界観を紹介する。

この一連の物語は、1943年にイギリスで生まれた。ウィルバート・オードリー(図B)という心優しい牧師が、はしかに苦しむ息子を励まそうと即興で創作したのがはじまりという。機関車を主人公とした物語のベースには、ウィルバートの幼い日の思い出が色濃く反映している。

ウィルバートは、1911年、ロンドンに隣接したハンプシャー州ロムジーという小さな村の司祭館で生まれた。ウィルバートの父、ベア・オードリーもまた聖職者であった。家の庭には、父の趣味で鉄道模型が敷き詰められており、ウィルバートは兄や父とともに毎日模型で遊んだ。この時間の中で、彼の鉄道趣味は基礎付けられた。1830年、マンチェスター～リバプール間に世界で初めて蒸気機関車の営業運転が開始されて以来、イギリスでは民間主導で鉄道が整備され、1948年に国営化されるまで、100以上もの鉄道会社が設

立された。会社間の争いは熾烈で、統廃合を繰り返した。ウィルバートの幼少期はまさに、皆が鉄道に熱中した時代だった。

1917年から28年、6歳から17歳までの時期を、ウィルバートはウィルツシャー州ボックスという町で過ごしている。ここにはグレート・ウェスタン鉄道の線路が走っている。幼いウィルバートは、列車を眺めに父とよく散歩に出かけた。自宅から徒歩3分ほどの場所には「ボックス・トンネル」と呼ばれる巨大なトンネルの出入り口があった。全長3キロにも及ぶこのトンネルは、傾斜地に建設されているため、当時の機関車はここを登るにも下るにも補助機関車が必要だった。西海岸の港に陸揚げされた荷物を満載した貨物列車は、決まって夜中にやってくる。トンネル近くにあった補助機関車用の機関庫から小さなタンク式機関車が3回汽笛をならして登場すると、貨物列車に連結するガチャ、という音、それに続いて2種類の異なる蒸気の音がする。ウィルバートはそれをベッドの中で幾度となく聞いていた。2台の蒸気音は、まるで機関車が会話しているかのように聞こえたという。

「むりだ。むりだよ。むりだぜ」

「ぼくは やるよ。やるさ。やるとも。」

このエピソードは自信家のゴードンを優しいエドワードが助ける「エドワードとゴードン」と

いう物語になり、1945年に最初に刊行された“The Three Railway Engines”(邦題『3だいの機関車』)の中に収められた。

他にもウィルバートの機関車に対する強い思いを感じられるエピソードがある。1963年に刊行された『がんばりやの機関車』は、ステップニーという蒸気機関車が活躍する一冊である。この中でステップニーはブルーベル鉄道からやってくる機関車として描かれ(図C)、同鉄道にいまも実在する。ブルーベル鉄道は引退した蒸気機関車を保存する鉄道である。この本が描かれた頃、イギリスの国鉄は蒸気機関車の引退が急速に進められ、次々とディーゼル機関車に使用転換される状況にあった。そうした状況をふまえ、ステップニーはブルーベル鉄道に感謝しながらスクラップに怯えるすがたで描かれている。ウィルバートはステップニーを実名で登場させ、自らのおかれた状況を語らせることで、大好きな蒸気機関車の保護運動を推進しようとしたのである。

このように「汽車のえほん」には、イギリスに実在する鉄道にまつわるエピソードが沢山採用されている。こうした視点で見直すと、個性的なキャラクターたちを追いかけるとは違う「きかんしゃトーマスとなかまたち」の世界の楽しみ方が広がる。

(廣田理紗 当館主任学芸員)

「美しい日本のデザイン Made in Japan 50's-60's」

2014年8月2日(土)～9月23日(火・祝)

休館日:火曜日 開館時間:午前10時～午後6時30分(展示室への入場は閉館30分前まで)

企
画
展



図1



図2

図1.『読売新聞夕刊 1964年10月10日』
提供:読売新聞社

図2.《東芝 自動式電気釜》
1956年 増田健一コレクション蔵

図3. 森英恵《ジャンプスーツ、カフタン》
1966年 当館蔵



図3

「東京オリンピックの時代」のデザイン

昨秋、ブエノスアイレスで開かれたIOC総会で、2020年のオリンピック開催地が東京に決定した。これで東京でのオリンピックは二度目となる。最初の東京オリンピックは、今からちょうど50年前、1964年に開催された(図1)。終戦からおよそ20年、復興を果たした日本が再び先進国として国際舞台へ復帰したことを印象づけた重要な出来事だった。また日本のデザインの歴史においても、当時の日本の代表的なデザイナーたちが総力を挙げて取り組んだイベントとされている。本展では、この戦後復興から「東京オリンピックの時代」へ至る時期の工業製品を中心としたさまざまなデザインを取り上げる。

例えば1950年代半ばから「三種の神器」と呼ばれた洗濯機、冷蔵庫、テレビ(白黒)は、家庭で揃えられると理想的とされたあこがれの家電(家庭用電気製品)だった。テレビの代わりに掃除機や電気釜とする場合もあるが、こうした家電は、現在と比べかなり高価だったにもかかわらず、この時代に急速に普及した。中でも電気釜は、他の家電が欧米で発明されたのに対し、米を主食とする日本で生まれた製品であった。それまで、鍋や釜を使ってご飯を炊く場合、火加減に注意しなければならず、できるまで手

が離せなかった。1955年に東芝が発売した自動式の電気釜(図2)は、火加減の難しい炊飯の行程を自動化して、誰でもスイッチを押すだけで失敗なくご飯が炊けるようにしたもので、その便利さは画期的だった。

日本の生活様式を変えた製品といわれるこの電気釜は、ゆるやかな曲線と清潔感のある白を用いたシンプルなデザインで、当時の工業デザイナーからも高く評価されている。また従来の羽釜やかまどを思い起こさせるかたちが残されているのも印象的である。1950年代のこうした製品は、戦前からの機能主義的な考え方にもとづいてデザインされる傾向が強かったが、消費社会がさらに進展していくのにあわせてデザインについての考え方も変化していった。

1960年代半ばには、カラーテレビ、クーラー、自動車が「新三種の神器」として喧伝された。東京オリンピックの開幕にあわせて東京モノレール、東海道新幹線が開業し、また首都高速道路、名神高速道路もつくられてモータリゼーションが進展した時代でもあった。1969年から2001年まで長年車名別販売台数国内第1位の座を守っていたトヨタのカローラは、オリンピックの2年後、1966年10月に初めて発表された(表紙)。ヨーロッパの大衆車をモデルに工

夫を凝らして開発され、本格的なマイカー時代を迎えた日本の代表的なファミリーカーとなった。

トヨタはそれまでに個人によるデザインから組織によるものへと、デザインのプロセスを変化させていたことが知られている。システムティックな手法を学ぶために、1950年代末、自動車などのデザイン教育に優れた実績をあげていたアメリカのアートセンタースクールに社内のデザイナーを留学させている。こうして、ひとりの個人による芸術的な仕事としてのデザインという考え方ではなく、巨大な資本を投じた製品を複雑な条件を満たしながらデザインしていくという総合的な体制のもとで、カローラは生み出されたのだった。自動車は日本を代表する輸出産業として、大きな発展を遂げることになる。

島根県出身の森英恵もこうした時期に、ファッション・デザインの仕事を始めた。1960年代にはアメリカへ進出、日本の意匠をとり入れたドレスを発表し高い評価を受けている(図3)。さまざまな分野でデザインが強く意識され、大きく発展した時代だった。本展で戦後日本の出発点だった時代の優れたデザインの数々を見直して頂きたい。

(河野克彦 当館専門学芸員)

特別展「森英恵 オートクチュールの精華」の 展示作業に密着して

島根県立石見美術館ではファッションを収集方針の一つとしているが、公立の美術館としてファッションに取り組む館は、いまだ多くないのが現状である。

今回は平成26年1月17日(金)から3月3日(月)まで開催された特別展「森英恵 オートクチュールの精華」の展示作業から、普段あまり見ることのないファッションの衣装展示に密着し、担当学芸員による展示空間の工夫や創意、新しい試みについてレポートしたい。

当館では、島根県出身であるファッションデザイナーの森英恵氏の衣装を10点所蔵していたが、さらに平成24年度に森氏より10点作品を寄贈していただいた。そのお披露目となるのがこの特別展であった。新収蔵を加えた全20点には、1960年代に発表した初期の作品から2004年のオートクチュールコレクションまであり、本展ではその仕事を網羅的に紹介することができた。

会場の様子(図1)を見ると、マネキンがいろんな方向を向いているのがわかる。漫然とマネキンを左右に振って配置しているのではなく、ここにも学芸員の計らいがある。この特別展を担当した南目美輝主任学芸員に訊いてみた。衣装の展示の場合、全体の中なかでどこをデザインの見せ場にするかとい

うデザイナーの意図を押し量る。たとえば、《ベージュのリンゴの花のドレス》(図1の左から2番目)では、背中の開き具合と縁の飾りがこのドレスの見せ場と考え、背中が見える向きにマネキンを配置したとのこと。

また、今回は壁の仕切りではなく、天井から布のオーガンジーを吊し、展示空間に工夫を施した(図2)。これは当館にとって初の試みでもある。学芸員の意図としては、それほど広くなく(300㎡)、天井の高いこの展示室に間仕切りの壁を設置してしまうと圧迫感がでるので、軽やかなオーガンジーを採用したとのこと。シースルーの布のむこうに衣装がぼんやりと見えることで、観る人のその先を見たいという気持ちを高める効果があり、学芸員が予想していた以上に会場はよい雰囲気になった。今回は衣装という柔らかな素材の作品の展示に合わせ布を垂らしてみたが、今後の展示にも充分活用できる試みであった。

美術館における展示の特質とは、博物館のような客観的で説明的な展示方法ではなく、芸術作品の展示が対象となることである。そして客観的な情報を伝える他に、日常とは異なった美的体験をも楽しんでもらうことを目的とし、観客が作品に新しい価値を見いだす助けをすることである。

先に述べたマネキンの配置やオーガ

ジーを活用した展示空間の工夫も、美術館ならではの展示のあり方を目指したものだが、この特別展ではもうひとつ新たな手法を試みている。それは、回転台を活用した衣装の展示である(図3)。これは、澄川喜一館長からの助言により実現した。このたびは、安全性に配慮し、無段階に回転速度を設定できるターンテーブルによって、ゆっくりと回転させるようにした。マネキンを回転台に載せると、全方位から衣装を見る事ができる上、特別感が演出でき、動きを伴って衣装を見せることが可能となった。結果、強いインパクトを観客に与えることとなり、日常とは異なった美的体験を楽しんでもらうという目的をいくらかは達成できたのではないかと思われた。

今回は衣装展示に注目してレポートしたが、日本美術、西洋美術、彫刻等どの領域においても、その手法は異なるものの、同様の工夫がなされている。展示される空間や作品の向こう側には必ず学芸員の意図が込められている。鑑賞者が作品に新しい価値を見いだす場として美術館を楽しんでもらうために、学芸員は展示の工夫や新しい試みに挑戦し、今日の展覧会をつくっているのだ。

(田中志依 囁託員)



図1

- 図1. マネキンが展示された様子
図2. 壁の代わりに布を吊した様子
図3. 回転台に載った作品



図2



図3